

# 研究ノート：（学会レポート）第3回メカデミア大会：日本 発アニメ・マンガ・メディア理論をめぐって（2012年11月 29日～12月2日、ソウル・韓国映像資料院および東国大学） ジャクリーヌ・ベルント（京都精華大学）

## 抄録：

2006年以来、アメリカのミネソタ大学出版局によって発行されてきた年刊雑誌『メカデミア（Mechademia）』を背景とするメカデミア大会は2012年11月29日～12月2日、会議「日本発アニメ・マンガ・メディア理論」というテーマの下で初めて北米でも日本でもない地、つまりソウルで開催された。「日本発」の娯楽メディアやそのファン文化に携わる研究者にとって貴重な交流の場となっていたが、本レポートにおいては問題点をも指摘している。具体的には、主な焦点が「日本発」の一種のアニメーションに制限されること、アニメーション特有の表現力よりもそれを手がかりとした文化論と哲学的な考察が中心に据えられていること、また、表現論・メディア論・社会批評の不均等な三角関係あるいは資料知識と理論構築とのギャップといった3点である。さらに、アジアを拠点とする研究者からの積極的な問題提起がますます求められていくと思われる。

■3rd Mechademia Conference on Anime, Manga and Media Theory from Japan “World Renewal: Counterfactual Histories, Parallel Universes, and Possible Worlds” (Nov. 29-30, 2012 Korean Film Archive; Dec. 1-2, 2012 Dongguk University, Seoul) Alexander Zahlten (Harvard University)

## Abstract:

Linked to the annual journal *Mechademia* (University of Minnesota Press, 2006-), the third Mechademia conference was held Seoul, from 29 November to 2 December, 2012. It deserves highest appreciation as a rare place of exchange for researchers engaged in entertainment media and fan cultures “from Japan,” but it was not without problems as this report indicates. First, insofar as most papers addressed only a certain kind of animation from Japan. Second, animation did attract attention mainly as grist for cultural studies and philosophical speculation. Third, the uneven relationship between representation theory, media studies and social critique, or the gap between familiarity with the material and theory orientation, was striking. The conference revealed also the need for more contributions by Asia-based researchers.

「メカデミア大会」とは、2006年以来、アメリカ合衆国のミネソタ大学出版局によって発行されてきた年刊雑誌『メカデミア（Mechademia）』<sup>1</sup>に基づいて2011年に1回目、そして2012年に2回目と3回目が開催された学術大会である。

アニメやマンガの「メカ」と、学術研究の「アカデミア」を組み合わせた造語は、雑誌自体の方針と同時にその延長線にある会議の傾向を適切に表している。つまり、「マンガ、アニメ、ファンアートのための年次フォーラム」と自称する『メカデミア』誌は、「メカ」という語が示唆するように「日本発」の視覚的娯楽メディアとそれに関係のある創作や受容に焦点を当てているのである。

この方針に長所も短所もあることは言うまでもないだろう。一方では、「日本発」の娯楽メディアやそのファン文化を中心に据えることによって、それに携わる研究者には発表と交流の場を用意し、英語圏における従来の映像研究や大衆文化研究、コミック研究より高いレベルで資料提供と理論分析を行うことができるのである。さらに、夏目房之介、伊藤剛、東浩紀他、近年日本国内の言説に大きな影響を与えた批評家を『メカデミア』誌の紙面上において、その代表作の部分的英訳を通して紹介する努力は評価に値する。

他方で、「日本発」のメディア文化を対象とし、主に北米と日本の視点から追究する傾斜が目立っている。それは、今回の会議にニューヨーク大学の文化人類学者兼日本学者トマス・ルーザー（Thomas Looser）と共に大塚英志がキーノート・スピーカーとして招聘されたことにも窺える。すでに第2回目の大会は「アジアの諸ポピュラー・カルチャー」をテーマに取り上げ、また第3回目となる今回の大会をソウルという北米でも日本でもない地で開催したが、企画者側の努力があったにもかかわらず、日本以外のアジアに焦点を当てた報告は、筆者が正確に数えたところ、十にも満たなかったのである。それはある程度、英語という使用言語にもよるとと思われる。しかし英語力の問題だけに限らないだろう。日本に留学したことのある韓国人、そして北米の大学システムの下で育っていない中国語圏や日本の若手研究者は、『メカデミア』誌と同様に今回の会議をも特

■受稿日：●●  
受理日：●●

研究ノート：第3回メカデミア大会：日本発アニメ・マンガ・メディア理論をめぐる  
ジャクリーヌ・ベルント

微づけた批評的主流とは微妙に異なるような切り口をとったり論証をしたりする可能性があるが、それを活かしながらもっと多声的な交流を成し遂げるのは今後の課題の一つとなるだろう。

問題状況を研究者の国籍あるいは学術の育成の場に還元してしまうことは当然ながら邪道になりがちである。それと同様に重要なのは、アニメなどの研究対象を如何に把握し、その範囲を如何に定めるか、さらに、これらの対象と「日本」はどれほど必然的な関係にあるかといった側面を検討することである。例えば、アニメの範囲について言えば、日本発のいわゆるアート・アニメーションが全く論じられず、世界中の若者に共有されている娯楽的なアニメに主役が与えられている。この狭義のアニメは、従来の映画学の専門誌や学会と比べて、専門性の高い形で取り上げられてはいるが、アニメーションとしてのアニメよりも（コミックスとしてのマンガと同様に）、メディアの特性を問わない日本発のサブカルチャーや情動の共同体、さらに先端技術と関連した映像メディアとしてのアニメが注目を浴びていることも事実である。

今回の会議を振り返ると、三つの根本的な問題が浮かび上がっていると思われる。第一に、アニメは「日本発」の一種のアニメーションに制限されることによって、日本的アニメに見えないにもかかわらず、構造的には、つまり表現の面でも（例えばリミテッド・アニメーションとして）使用の面でも（例えば自己完結した作品ではなくユーザーに開かれた参加型のアニメーションとして）他文化における類似したもの同士と比較する可能生が隠蔽されてしまう恐れがある。第二に、アニメは「少女」や「キャラ萌え」、「世界系」、「脱人間」および未来像をめぐる文化論と哲学的な考察をするための資料として採用されるが、アニメという表現メディアによって、他の方法で得られないような意味合いが生まれてくるのかどうかということはあまり注目を浴びていない。今回の大会でアニメを資料あるいは対象とした研究報告は過半数を占め、映像研究や表象文化論から現代思想と文化人類学に至るまで幅が広がったが、厳密な意味でのアニメ論はあまり行われなかったと言っても過言ではない

だろう。それは第三の問題点とつながる。つまり、特に「日本発」のアニメに焦点を当てる際、アニメ特有の制作と流通、また、それと密接に結びついているジャンルの「約束事」と観客の「期待の地平」を考慮に入れた上でのメディア論も求められているのである。しかし本会議では単独の作品を、カルチュラル・スタディーズ風に、社会自体あるいはそれをめぐる諸言説と直結させるような「読み」が恣意的な結論に至る場合が確かに見られた。換言すると、近年の若手研究者はアニメに親しみながら育ってきたこともあって、これを背景に豊富な資料知識をもっているが、この資料を如何に分析し如何に「社会」の考察と絡み合わせるかに関して方法論的な課題が数多く残されていると思われる。また、資料知識を得意とする研究者と、理論構築を得意とする研究者の間、逆に言うと、理論を犠牲にした資料重視と、具体的な資料を犠牲にした理論志向の間にぽっかりあいたギャップが存在し、キム・ジュニアンのように両極のバランスがとれている研究者は相変わらず例外だと認めざるをえない（それがマンガ研究にも当てはまることは言うまでもないだろう）。

最後にもう一点を述べておきたい。2012年初頭に公表された「Call for Papers」は<sup>2)</sup>、3.11の災厄や悲劇を念頭に別種の世界の可能性を開くことを文頭に挙げていたが、この呼び掛けに正面から対応した報告は予想よりも少なかった。特にクリス・後藤＝ジョーンズ企画のパネルに出演したライデン大学の大学院生、シンガポール国立大学の顔曉暉（Gan Sheuo Hui）と甘添發（Kam Thiam Huat）、近現代日本文学の専門家である中川成美（立命館大学）と木村朗子（津田塾大学）、さらにマンガ研究者の何人かは、自らの研究対象と研究方向を再検討する試みを見せたのに対し、東浩紀系の「反表象論」などをめぐる高度に理論的な考察には3.11以降の日本社会とその問題状況は何の影響をも及ぼしていないかのようなようである。つまり日本文化（あるいはサブカルチャー）における表象自体の相対化およびそれと関連する関係性重視など、極めて脱西洋近代的要素に世界的な未来モデルを求めることは、根本から疑問視されるべきだという声もある。

『メカデミア』誌が、2013年秋発行予定の第8号（手塚治虫特集）に引き続き、残り2号分を企画し、その最終号となる2015年発行の第10号をもって廃刊になることは、上記の限界とも関連しているかもしれない。このような限界を可視化することによってこれからの課題を自覚させるのは第3回メカデミア会議の一つの成果でもあったと言える。著名な研究者の何人かが、プログラムに載っていたにもかかわらず、結局ソウルまで足を運んでくれなかったことは残念だったが、若手研究者を中心に活発な交流が十分できた。そのための場を用意してくれたこと、韓国初の長編アニメーション映画「少年勇者ギルドン」（1967年）の上映会、さらに「Green Days ～大切な日の夢」（2011年）のアン・ジェフン監督および、日本の渡部英雄監督の対談を企画してくれた開催者、特にアレクサンダー・ツァーレンテン（ハーバード大学）にお礼申し上げたい。

註

- 1) *Mechademia*, Accessed Dec 2012, <http://mechademia.org/about/>
- 2) 野田謙介「第2回および第3回「メカデミア」国際会議の開催予定」、『メディア芸術カレントコンテンツ』アクセス2012年12月、<http://mediag.jp/news/cat/23.html>

